

東南アジアにおける民族服の研究 (第6報)

北部タイ山地民族 ラフ族の衣装

柴村 恵子・榊原 弥生

Studies on Folk Costumes of South-East Asia (VI)

The Costumes of the Rafu Hill Tribes of Northern Thailand

Keiko SHIBAMURA and Yayoi SAKAKIBARA

緒 言

今日、衣生活は多様化し、各人が個性や好みによって自由な装いを楽しむ時代になってきている。それは生活環境や社会現象による慣習の変化によったことなどが要因であると考えられる。これは現代文化の進展に伴った国際的な交流や、世界のあらゆる情報文化によって生ずる衣生活の国際同化といえる。そのような中であって、東南アジアの内陸部山岳地帯から中国西南部を中心とする地域には、今もなお固有の文化を保持している少数民族がいる。彼らは互いに孤立し、肥沃な土壌や緑あふれる自然の中で近代文明とは掛け離れた先祖伝来の文化を守り、独自の生活を営んでいる。民族服は本来その民族を固持しているという大切なあかしであり、最も端的に視覚によって確認できるものであったが、現在はそれが国際同化によって失なわれつつある。しかし、上記のこの地域には種族により地域によって、一目でその区別がつくほど特有の衣裳を着用した民族がいる。中でも特に女性にそれが顕著に見られる。

私たちは、この変貌する社会の中で彼らがなおこれを固持し続けていることに興味を持ち、北部タイに住む少数民族の衣裳とその背景について調査を行ってきた。すでにメオ族他4種族について報告したが、今回はラフ族の生活と衣裳について報告する。

調査地及び資料

1. 現地調査……1980年から1987年にかけて北部タイのチェンマイ、チェンライ、チェンセンの山岳地帯で調査を行いラフ族の村を訪れ、聞き取り、観察、写真撮影を行った。
2. 資料……現地で入手した衣裳及びリトルワールド所蔵の衣裳の採寸、観察。

結果及び考察

1. ラフ族の概要

ラフ族は中国西南部の雲南省・ビルマ・ラオス・タイなどに広く分布する少数民族である。その祖先はメコン河上流の^{ランツァンチヤン}瀾滄江流域の山間部が源流とされており、チベット系の半蕃半農民族で、最近までは狩猟と焼畑農業を生業としてきた民族である。「ラフ」とは彼らの自称による名称であるが、中国では「^{ラフズー}拉祜族」と呼び、タイ人は「狩猟をする人」という意味の「ムッシュール (Museum)」と呼んでいる。また、Paul・Lewis氏¹²⁾によればラフ族は自分たちの

ことをラフ語で「天の恵みの子供」の意の「ボンヤ (bon·ya)」とも言っている。これは自分たちが他の山地民族の中でも特に神に恩恵を請う民族であり、健康、豊作、子孫繁栄等、様々な願いを常に持っているということから生じたもののようである。彼らの言語はアカ族、リス族と同様、チベット・ビルマ語系に属し、ロロ族（現在中国では彝族と呼んでいる）がその祖先であるといわれる民族である。この種族の人口はおよそ中国に25万人、ビルマに15万人、タイに4万人、ラオスに1万人（1983年）と推定されている。この種族は幾世代もかけて南下し、ビルマ、ラオスなどを通り1830年代初期にはタイの北部に住みはじめ、その85%がタイ北部のチェンマイ (Chiang Mai)、チェンライ (Chiang Rai)、チェンセン (Chiang San) 周辺に住み、残りはマエホンソン (Mae Hong Son) やターク (Tak)、カンペーンペット (Kamphaeng Phet) 付近に住んでいる。タイのラフ族は主に衣裳の色や手芸にみられる特色からラフ・ニ (赤ラフ)、ラフ・ナ (黒ラフ)・ラフ・シェレー (黒ラフ)、ラフ・シ (黄ラフ)¹²⁾の4種族がよく知られているが、それが細分化され更に各グループにというように複雑に分かれている。Paul·Lewis 氏によればタイに最初に移動してきたのはラフ・ニ族で、彼らは現在タイのラフ族人口の46%を占める大集団である。次いでビルマ経由でラフ・ナ族が移動してきたといわれているが、今では18%を占めるのみで人口は少ないが歴史的にはラフ族のルーツである種類だと伝えられている。しかし、いずれの種類においても生活習慣や儀礼については特に顕著な違いは見られない。

2. 生活と習俗

(1) 住居

一般に山地民族の村造りには適当な水源があり耕作可能な肥沃な土地が条件とされている。それに加えて種族に適合した山の斜面と標高が必要である。北部タイの山地には10種類あまりの山地民族が住んでいるが、このうちカレン族は最も平地に近く1000m～600mくらいの標高のところに集落を造る。それに比べメオ族やリス族は最も高いところを選び、通常1600m以上の高地に村を造る。また、ラフ族、ヤオ族は1500m～1200m付近の斜面に村を造るが、この場合ヤオ族は平地面を造成して平土間式の家を建てる。しかし、ラフ族は同じ標高の場所でも山の斜面にそのまま高床式の家を建てる。したがって四隅の柱を比べると上方と下方では長さが異なりそれは左右でも異なる場合もある。なお、彼らはお互い同一の所に住むことはない。タイのラフ族の村は318戸¹²⁾で、その住居は一般には単棟型で高床式住居の切妻造りであり (図1)、村を遠望すれば一目でラフ族の村であるとわかる程特徴がある。しかし、調査したラフ・シェレー族の Huai·Muang 村には台所の棟と寝室の棟とが露台をはさんで配置されているのが見受けられた。(図2・3) 家の中は中央に炉があり、そこは家族だんらんの中心の場となっており、露台には梯子をかけ出入口が設けられている。彼らの世帯は一世帯が単位になっていて、平均5.8人とされているが、寝室は核家族ごとに竹や木の板で区切られている。ラフ・ニ族の Cha·Phu 村では台所用具は入口を入った左の側面に設けられており、また食物倉庫は別棟の貯蔵庫の他に家の中にも中二階にその設備がある。そこへの上り下りは柱に約50cmくらいの間隔に図4に示すような小さな木が打ちつけられており、それに足をかけて梯子代わりに使用する。宗教は本来はアニミズムであるが、屋内の一番安全な場所に祭壇を設けるということである。しかし、今回調査したどの村でもそれは見られなかった。ただ各部屋にはカギが掛かっていて中を見るのが出来なかったため、その小部屋が或は神聖な場所であったのかもしれない。しかし、ラフ・シェレー族の台所の入口の上には竹で図5に示す鳥の巣のような物が掛けられており、それは精霊信仰のシンボルであるということであった。

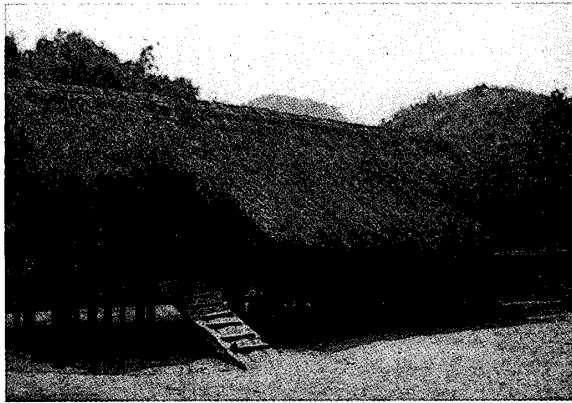


図 1

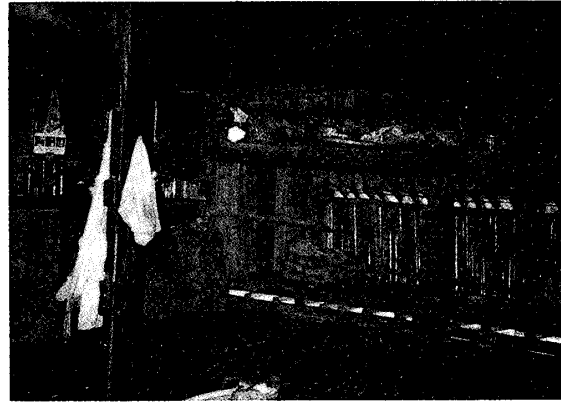


図 4

ラフ・ニ族 (Cha・Phu村)



図 2

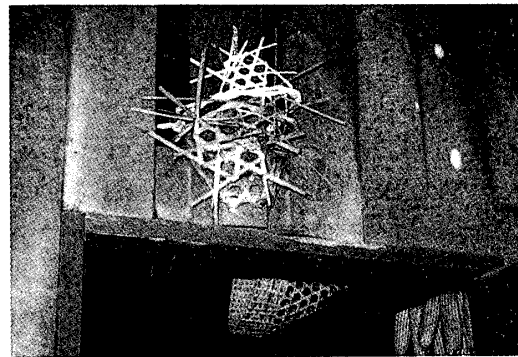


図 5

図 3



ラフ・シェレー族 (Huai・Muang村)

(2) 食生活

ラフ族も北部タイに住む他の山地民族と同様、焼畑農業を営み主食はそこから収穫される米である。米は5月のモンスーンが弱まった頃種蒔きを行い、雨期の終る10月頃刈り入れをする。刈り取られた稲は、それぞれの家で必要に応じ脱穀しながら食用にする。彼らの家では穀物は湿気やねずみ等の被害を避けるため高床式の貯蔵庫に蓄えるのが一般的である。また、彼らは米のほかにトウモロコシ、カボチャ、キュウリ等を栽培し副食に供するほか、家畜のえさにもしている。ケシも栽培するが、それはヤオ族、メオ族、リス族などと同様彼らの貴重な収入源となっている。これはトウモロコシ、トウガラシ、ダイズ、コショウ等との二毛作で栽培している。これらのうちトウガラシ、コショウの栽培については、ラフ族は他の山地民族より秀でた技術を持っており、彼らの重要な交易品となっている。ケシ栽培に対し、タイ政府は王室が

先にたつてこれをやめさせようとしているため、それに代わる交易品としてコーヒー豆、茶、果物等を栽培するよう指導し、彼らの定住化と共に次第に定着させつつある。また、彼らにとっては豚、鶏の家畜は食生活における重要なタンパク源である。しかし、食用としての目的は二次的なものであり、あくまでもそれは精霊への生けにえ用で儀式には欠かせない必需品として飼育しているものである。日常のタンパク源は捕獲した野鳥や野獣で補い、キノコ、タケノコ、果物、ナッツ、ハチミツ、ハチの幼虫、その他昆虫なども食卓にのせている。食器には木をくり抜いたもの、竹で編んだもの、中華鍋や中華鍋の代用に洗面器、水入れにはひょうたんや竹筒を使用している。なお、ラフ族の男性は他の山地民族に比べると家事の手伝いをよくするが、しかし水くみは女性の重要な仕事の一つである。ヤオ族やメオ族は竹の笕で谷水を村まで引いているが、ラフ族はひょうたんや竹筒を数本竹かごに入れて背負い山道を水くみに出かけるのが日課である。

(3) 宗 教¹²⁾

宗教は山地民族にとって最も大きな心のよりどころで、これは衣・食・住の生活の上に大きな背景となっているのでここではそれについて触れる。

1) 信 仰……ラフ族の伝統的宗教は万物に精霊の存在を認め、多神を崇拝する精霊信仰である。しかし、最近ではタイ族の影響により仏教も取り入れられ、村には寺のあるところもある。また、その他カレン族の一部に見られるようなキリスト教信者がラフ族のうちにも1/3くらいいる。その中でラフ・ナ族やラフ・シ族にはキリスト教信者が多い傾向がみられる。これはかつてビルマがイギリスの植民地であったころイギリスの宣教師がキリスト教を布教した影響によるものと言われている。特に中国からビルマを経由して北部タイへ移動してきた種族にその信者の多い傾向が見られる。しかし、彼らの心の根底にはアニミズムを信条としながら、キリスト教も信仰しているという結果になっているようである。したがって、宗教的儀礼をはじめ村の祭司はシャーマンによってとり行われることが多い。

2) 新年の儀式……北部タイのラフ族の新年は一部には中国の新年（春節）に揃える村もあるようであるが、多くは収穫後の農閑期の縁起の良い日を村で決めて行っているようである。この日には女性は衣裳を新調し、家宝の銀の装身具等をすべてつけて着飾る。新年の儀式の中で最も重要なことは新しい水をむかえてくることであり、次に糯米を各家々と交換しあい、それで餅をつくことである。それが村人同志の団結を計り、相互依存の確認をしあうことにもなる。祭りには男性はコマ回し、女性はボール遊びなどをして楽しみ友人を訪ね歩く。これは若い男女にとっては結婚相手を探すよい機会でもある。

3) 結 婚……ラフ族には三世代以内に共通の祖先が見られるような相手との結婚は認めないというのが伝統として守られている。この種族はカレン族と同様、娘が両親と同居する妻方居住型である。夫は3～7年間妻の両親と同居し、この間に労働を提供する習わしである。それは山地民族にとって労働の提供は大変貴重であり、その家から娘の労働力を奪うことに対する報酬と結納金にあたるものようである。長女は次女が結婚するまでは両親と同居するが、その後は近くに新居を構え、核家族となり独立する。これらの習慣から最後は末娘が両親と同居することになる。ただし、夫が仕事に怠慢であったり、両親に従順でない等の原因で離婚が生じた場合は、子供は母親が養育する義務があり、夫は養育費を支払う。同じ言語系のアカ族の父系制に対し、ラフ族は典型的な母系制である点興味深い。また、キリスト教の村では結婚式は西洋からの伝統に近いもので、聖書の教えを誓ったりする。一般のラフ族には結婚式という特別なものはなく、花婿が豚を、花嫁の家族がご飯やその他の食べものを用意し、村中の人

を招いて披露宴を催すのが習慣である。一般に他民族との結婚はないようであるが「買い子」という習慣があり、ラフ族やアカ族は自分達より金持ちで、且つ、山の主人公とされているヤオ族に子供を預け、養育してもらうことは子供の幸せにつながるとして売りに出すことがある。このことから事実上間接的には他民族との結婚は行われているといえよう。

4) 葬儀……ラフ族のうちラフ・ニ、ラフ・シ、ラフ・ナ族は死体を埋葬し、ラフ・シェレー族は悪死の場合を除いて火葬にするといわれているが、栗原悟氏¹⁰⁾によると伝統的な葬制は火葬で地方により土葬も見られると言われていることからみると、それはタイ族の影響を受けているものとも思われる。ラフ族はもとはタイ族系の民族で、社会構造の母系制等についてもよく似ている。これはタイへ移動してから後のことか、或いはその源流である中国からのものなのか、この点を明らかにするにはその変遷を調べることが必要である。悪死とはラフ族の最も不吉な死とされていることで事故死など流血を伴う死や流産等をさしているようである。この場合は悪霊を追い払うためのシャーマンによる儀式が行われる。棺には死体と一緒に鶏の足を1本と翼を1枚入れる。道中のどが渴けばその足で井戸を掘り、暑い時には日よけ用に翼を使用するよう死人に教えるというのであるが、日本の地方に伝わっている冥土への旅支度と言って紙でお金などを作って棺の中に入れる習慣とよく似ている点、日本文化の源流とかかわりがあるのではないだろうか。また、葬儀の後は悪霊にとりつかれないよう体や衣服を清めるということであるが、これも日本の清塩に相当するものと思われる。

3. 衣生活

山地民族は閉鎖的な生活をしていて、独自の風俗習慣を何世代にもわたって受け継いできたが、衣服もその生活の中から生み出され、今日まで伝承してきたものであろう。したがって、彼らの衣生活は種族ごとに生み出された先祖伝来の特有の衣裳であり、T(時)・P(場所)・O(目的)などには無関係で年間を通して着替えることなく着用してきたが、それに施されている手工芸には他のものではまねることのできない素晴らしいものがある。しかし、そのような生活の中にも近代化の波が押し寄せ、伝統衣裳にも変化が見られるようになった。特にラフ族はアカ族、メオ族等の山地民族に比べ、かなり近代化された衣生活を送っているように思う。かつては日常着であり正装であった種族特有の伝統衣裳が家宝として仕舞い込まれ、祭礼の時のみに着用する傾向が出てきている。これは私たち日本人の和服に対していただく感情と似たものである。特に平地のタイ人との接触の機会の多い村ではその傾向が顕著である。男性はTシャツに西欧風ズボン、女性はビルマスタイルといわれるノーカラーのブラウスにタイ人の更紗柄の筒型のスカートをはいたりする。その中でもラフ・ニ族とラフ・シェレー族は比較的独自の民族衣裳を着用している方であるが、ラフ・ニ族の中には村にミシンが普及しはじめたことにより、新しいテクニックを伝統衣裳に取り入れ装飾を加えて新しい民族衣裳に変化させていることもあるという。そのような中であっても全グループの伝統的な衣裳に残されている共通点は細かい手芸的テクニックと銀細工の装飾である。しかし、今回の調査でチェンセンの山中にラフ・ナ族から分派したといわれるラフ・クーラウというラフ族の村を訪れたが、その衣裳には今まで私たちが見たラフ族のものと同通する点は見られなかった。それは祭りには白い衣裳を着用し、手芸的な装飾もほとんど見られなかった。男性の衣生活はどの山地民族も同様であるが、近代化への順応が早く、Tシャツに西欧式のズボンを着用している者が多く、伝統的な衣裳は次第に見られなくなってきているので、種族の特色を保持している女性の衣裳について考察を行ったので以下に述べる。

(1) ラフ・ナ族

この種族は先にも述べたようにラフ族のルーツであると伝えられているが、衣裳の面では北部タイに住む他のラフ族との共通性はあまり顕著ではない。むしろ中国の少数民族の形態に似ている点が多いように思われる。それは中国の少数民族の衣裳の多くは胡服に似た打合いが多いが、ラフ・ナ族もそれに似た傾向にある。これをラフ族の原型と見るならば、いかなる歴史的背景のもとに現在のような分派ができたものかそれを探究することは大変興味深い問題である。タイの少数民族の場合ではそれはリス族の上衣とよく似ている。この種族は表1に示すように中国服風の打合いで立衿のロングドレスと筒型の巻きスカートの組み合わせである。その上衣の裁断法は肩線は和服式の接ぎのないもので、それに細い筒袖のついた直線裁ちである。タイの山地民族の衣裳は平面裁ちで直線の多い形態の中で、打合いに曲線が用いられている点他との大きな相違であるといえる。中国のラフ族を形態で分類すると数種類になるが、これに似た上衣を着用した種類はスカートのみではなくズボンと組み合わせていることもある。山地民族の多くは藍染めの手織木綿あるいは麻を用いていたが、平地民族との交流が多くなるにしたがい市販の生地を用いる者が多くなってきた。また、日常は平地民族と変わらない衣生活をしており、祭礼時のみに民族服を着用する傾向も次第に多くなってきている。

手芸的な装飾は衿、打合い、袖口、脇のスリットの回りに小片の布を重ね合わせたものをアップリケの手法でトリミングし、更に、衿、衿から打合い、肩回りには図6に示したように幅

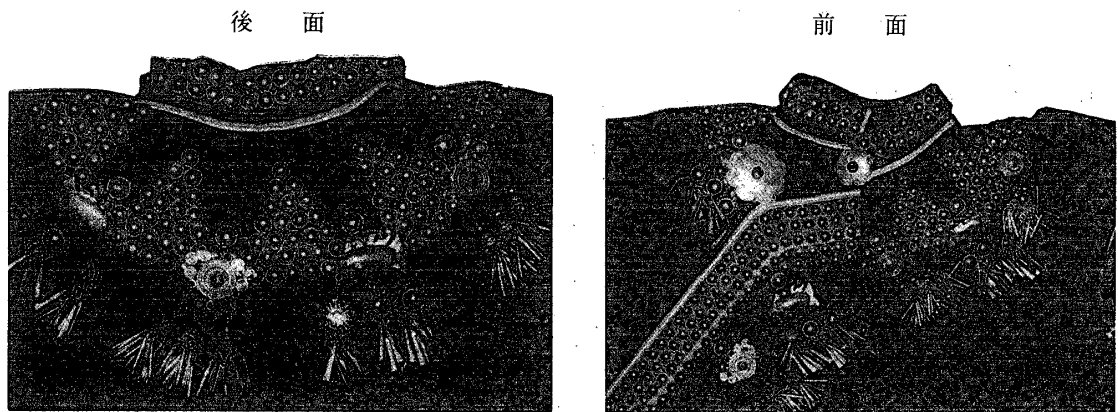


図6 ラフ・ナ族の銀細工刺しゅう

広い円型のヨーク風に銀の兵を並べてつけ、その先には魚や車輪などの銀細工の装飾が重い程下げられている。カノミ女史によると魚は水中に住み、いつも食べるものがなくなるという心配がなく、また車輪は丸く終りが無いという意味から縁起のよいものとされ、図案として用いられているということである。このことは山地の水の不便な自然環境の中で生活している人々にとっては貴重な生活の根源であり、五穀豊穡を願った装飾であるものといえる。

(2) ラフ・クーラウ族

この種族はラフ・ナ族から分派したというグループであるが、文献等にもあまり見られない珍しい種族である。この村はチェンセンの北の山中にある30戸あまりの Huai·Sa 村で、30年程前にシャーマンのおつげによりラフ・ナ族（黒ラフ）から祭礼時には白い衣裳を着るグループに変わったということである。しかし、そのような村でも訪れた時には比較的年輩の女性は日常でもその衣裳を着用していたが、若い人や子供はTシャツやブラウスにタイ式の更紗のスカートをはいている者も多く見かけた。また、男性もシャツに色もののルーズなズボンをはいていたが、若い男性では西欧式のズボンをはいている人も多く見かけた。山地民族の衣裳は先にも触れたごとく、かつては多くが藍染めが基本であったが、最近では市販の布を用いるよう

表1 ラフ族の衣裳

	上下衣	着装	装飾	布	機	布の厚さ 密度	色	縫製
ラフ・ナ族		ターバン チョーサン型の上衣 スカート 脚絆	細い布を重ねたアップリケ 銀細工刺繍 銀製装身具	木綿	後帯機	厚さ 0.62 ~ 0.79 (mm) 密度 18 ~ 28 (本/cm)	黒・紺(藍染め)	ミシン縫い 返し縫い 折り伏せ縫い 並縫い まつり縫い 巻き縫い
ラフ・クーラウ族		垂領式上衣 スカート	銀製装身具	木綿	高機	厚さ 0.77 ~ 0.86 (mm) 密度 12 ~ 20 (本/cm)	茶・生成り	並縫い 三つ折りまつり 三つ折りぐけ
ラフ・シ族		打合いつき合わせ上衣 ベルト・銀製鎖 スカート	刺繍 (チエーンステッチ・コーチング ステッチ・ストレットステッチ) 細い布を重ねたアップリケ 銀細工刺繍・銀細工バックル 銀製装身具	木綿	後帯機	厚さ 0.45 ~ 0.59 (mm) 密度 20 ~ 24 (本/cm)	黒・青・赤	ミシン縫い 返し縫い 折り伏せ縫い 並縫い まつり縫い 巻き縫い
ラフ・シエレ族		ターバン 打合いつき合わせ上衣 帯 ズボン 脚絆	細い布を重ねたアップリケ 銀細工刺繍・銀細工バックル 銀製装身具	木綿	後帯機	厚さ 0.58 (mm) 密度 20 (本/cm)	黒	返し縫い 巻き縫い 折り伏せ縫い 三つ折りまつり

になり、黒色の衣裳を着用する種族が多くなった。しかし、この村では図7のように綿から紡いだそのままの糸と茶綿から紡いだそのままの糸で織られた大変珍しい衣裳を着用している。また、どの山地民族も次第に機織はしなくなってきたが、今回調査したこの村では自家栽培により綿作りから機織まですべてを行っていた。その順序を図8に示す。

機織……彼らの家は高床式でその下が仕事場になっているが、その床下の柱に綿の種を取る器具を取り付け（図8-1）種を取り、弓で綿打ち（8-2）をし、そのすんだ綿をちぎって棒に巻きつけて（8-3）巻き綿を作る。次にそれを糸に紡いでゆくのであるが、機織は地機の足を高くし、織手が丁度椅子に座ったような姿勢で踏木を踏み、綜統を上下させる高機であるが、それは地面の傾斜地を利用して木枠を組み立てた機台である（8-4）。織機を図解すると図8-5のようになるが、綜統は2枚で綾棒はなく緒巻（男巻）もないもので経糸の先はひとまとめにして杭に結びつけ固定させている。緯糸には杼を用いず、ただ糸を毛糸の玉のように丸くしたものをくぐらせている。ある程度織れると織れたものを手で巻き込みながら織手が棒台を前に進めるかあるいは杭に結んである経糸をゆるめて糸の調節をするのである。織っていた糸は糊のきいた単子であった。素材の密度、厚さは表1に示す通りである。



図7 ラフ・クーラウ族の衣裳

(3) ラフ・ニ族

このグループは北部タイへ最初に移動してきた種類であり、人口的にもタイのラフ族のうちでは最も多く61%を占めている。彼らは他のラフ族と異なりビルマの風俗習慣の影響を強く受けておりキリスト教信者も多い。北部タイには100年くらい前から住み始めたようであるが、今回調査したチェンライ山中の Cha・Phu 村は戸数約50戸でおよそ300人の村である。今から20年くらい前にこの土地に移ってきたということであるが、村へ入ると今までに調査したラフ・ニ族とは衣裳の雰囲気や色が違っていた。よく調べてみると彼らは移動する過程においてリス族との交流があったことが明らかになった。本来は黒地である衣裳の色がリス族の用いる水色が女性の上衣や男性のズボンに、また子供服にも見受けられた。ラフ族は他文化に対して寛容であり、容易に他文化に同化されやすい民族性を持っていると言われていたが、中でもラフ・ニ族の場合特にその傾向が強いように思われる。この種族の衣裳は基本的には筒型のロングスカート、腰丈までの短い上衣に直線裁ちの長袖がT字型についている（図9）。打合いは直径10cm程もある銀細工のバックル式のもので止めている。その素晴らしい手工芸的な刺しゅうや装飾のされた一着の衣裳の中でも、目に見えない所までも大変手の込んだ仕立てがしてある反面、裁ち端がそのままになっているような粗雑な部分もあり、我々との感覚の違いを感じさせられた。装飾に用いる銀の量は裕福さの程度によって様々である。しかし、日常着用しているものはループ止めや時には安全ピンで止めたりしていることも多く、銀の装飾はあまり用いていない。カノミ女史によると、以前はこの銀の装身具を誰もが常に肌身離さずつけて暮らしていたが、最近では山岳地帯の治安問題などの関係から祭時の日には全部出して身につけるが、普段

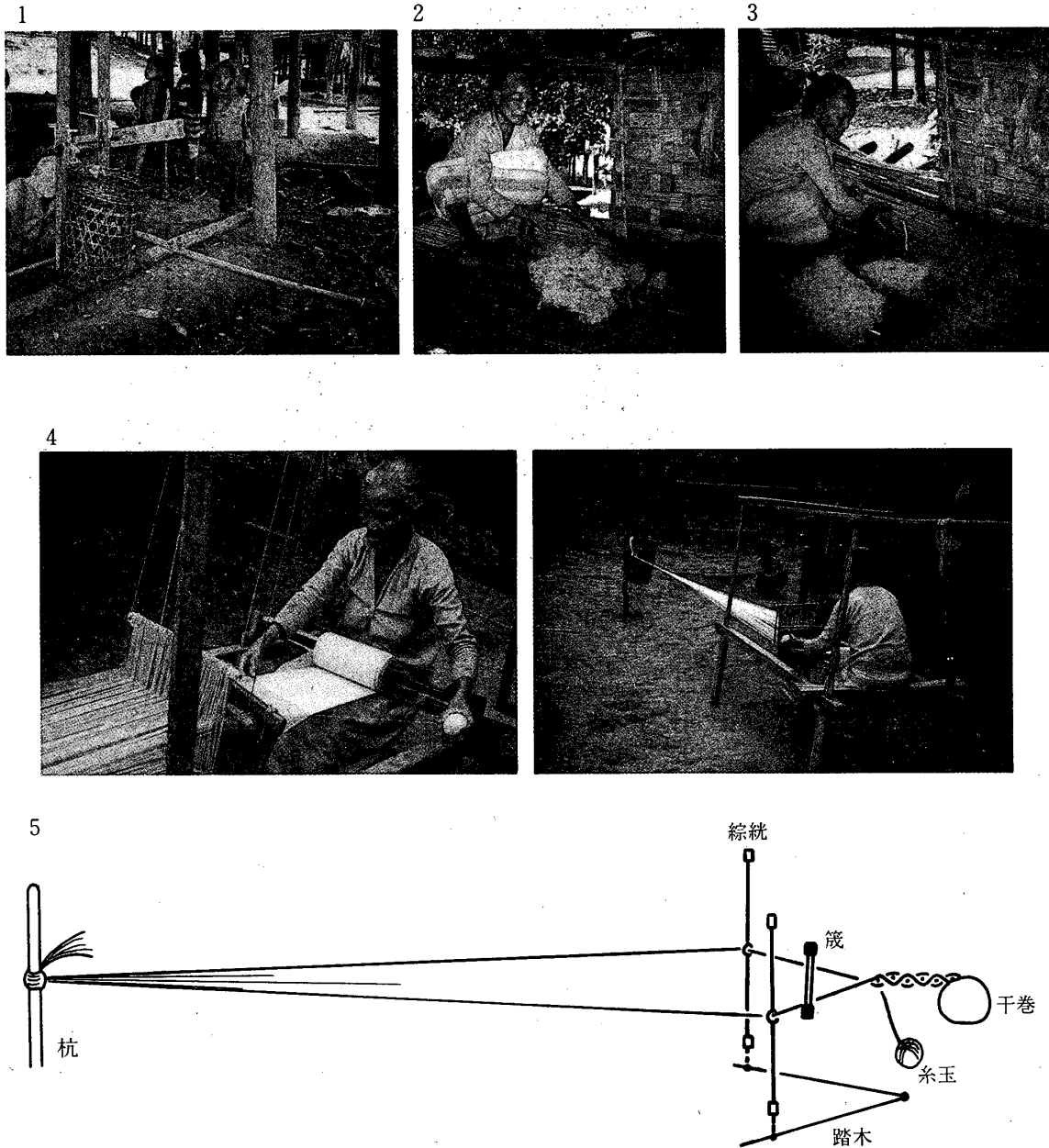


図8 ラフ・クーラウ族の機織

は山の中に隠している人もあるという。遊牧民は財産としての高価な装身具を肌身離さず常につけている習慣を持っているということであるが、ラフ族も焼畑農業を行いながら移動を続けてきた民族であるが、このへき地の山地にまでこのような問題がおこっていることに驚きを感じた。下衣は黒の布を筒に縫った中に体を入れ前で深いヒダを1本たたんでウエストの内側に折り込み、その上から銀の鎖ベルトを締めたり、ひもで結びスカートにはさみ込んで着装する。そのスカートの上・下には丈の補充と装飾をかねて30cmくらいの別布が足されている。腰布にはよく赤地に他色を混ぜて織られた縞の布が用いられ、裾には小布をたたんで並べ重ねたりリックラックブレード（山路ブレード）のような細かい手法の手芸的な装飾がアップリケされ、その下は白い無地の木綿の布がつけられている。

この衣裳形態はラフ・シ族（図10）も同様であるが、スカートの裾の手芸的なテクニックは

ラフ・ニ族より幅広く、白の布の部分は赤い布がつけられており、赤系統の布に刺しゅうやアップリケの施こされた下衣である。上衣の袖つけ部分、袖口、裾にもスカートの裾と同様の手芸的な細かい手が加えられているが、Paul・Lewis氏によると黄ラフに分類されている点については今後の課題である。ラフ・ニ族は一名赤ラフと呼ばれているグループであるが、この語源は上衣の打合いや袖口、裾などを赤の布でトリミングし、それが一際映えてみえるところからこのように名付けられたと言われる程、黒の身頃に赤の太い縁どりが目立っている点一つの特色であろう。

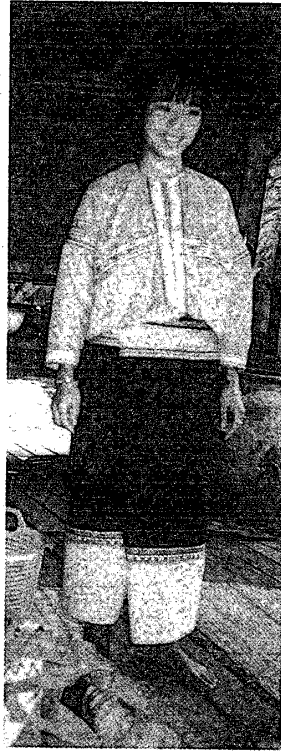


図9 ラフ・ニ族の衣裳



図10 ラフ・シ族の衣裳

今回調査したチェンマイ郊外のラフ・シ族の Huai・ghong 村は6年前にビルマとの国境付近から略奪や強盗にあって移動してきたものである。今は幸せだがまだ向こうには身内や知人が住んでいるので心配しているということであった。この村は15戸で80人程の小さな村であったが、村には猿をペットにして飼っている人や、衣裳についてもビルマ式のブラウスを着用している人や、またラフ族用にミシン刺しゅうなどをした市販の布を買ってくる人もあると聞き都市文明への同化を強く感じた。一般にラフ族は衣裳に艶のある生地を好むが、この村では綿サテン風のブルーの上衣に黒の筒型スカートに赤のトリミングの衣裳であった。村によってはベルベティーンの生地で作られた衣裳も見られる。これはビルマやバンコク方面から持ち込まれるもので、村ではすでに機織をやめてしまい平地から布を購入して衣生活をまかなっていることが多くなっている。

(4) ラフ・シェレー族

このグループは英語では「ブラック・ラフ」と呼ばれているように黒い衣裳が特徴である。彼らの衣裳は男・女、大人も子供も黒の長袖の上衣に黒のズボン、黒の脚絆である。男性は黒の長めの上衣に膝下丈のルーズなズボンで上衣のバンドカラーと袖口に青の布がつけられ、裏は白木綿のついた総裏仕立てである。女性はチュニック式の上衣に下衣は裾に赤・黄で数本の細いステッチのされた黒のルーズな前後の区別のないズボンをはく(図11)。その形態は表1に示すが、ラフ族の女性がズボンをはくのはこのグループのみである。また、足には衿先の丸いショールカラーのように上端が折り返った型の脚絆をつける。山地民族はそれぞれ種族特有のテクニク、色相いで手芸的な装飾を施しているが、このグループは白と薄黄色に赤と青を数本組み合わせ合わせた大変洗練された色相いの装飾である。その手法は1cmくらいの幅の細長い布



図11 ラフ・シェレー族の衣裳

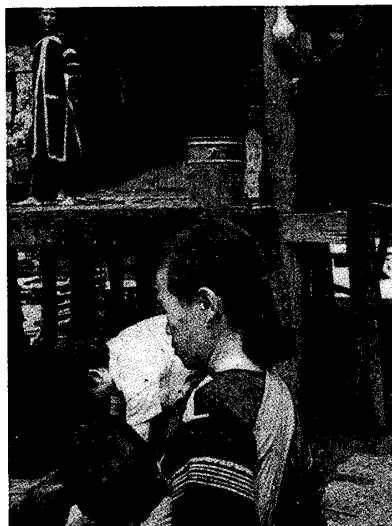


図12 ラフ・シェレー族の髪型

を2つ折りにし、それを0.2cm幅くらいずつずらせて重ね合わせ5cm幅くらいのブレードを作り、それを図11のように打合いから丁度“E”の字を左右に配したようにトリミングし、その先を脇のスリットの回り、後身頃の裾から腰丈あたりまで配した大胆なデザインの衣裳である。藍染めの生地に赤色等の配色がよく用いられている山地民族

族の色相いとは異なった配色である。そのテクニックが脚絆にも用いられている。髪型は前髪をそり（図12）、後頭部の髪だけは一つに束ねている。時には白や縞の布のターバンをしている者もいるが、カノミ女史によると、この髪をそるのは荷物を前頭部から背中へ下げて運ぶのでベルトを額からかけるのに邪魔になるからだということであり、山地民族の生活の険しさを感じた。

ま と め

1980年以来北部タイの山地に住む少数民族の生活を衣裳を中心に調査し、すでにメオ族、ヤオ族、アカ族、リス族について報告したが、女性の衣裳は特にその色や形態などの特色に顕著なものが見られた。各種族はそれを着用することに忠実であり、それが種族の身分証明でもあり、種族維持のあかしにもなっている。今回はラフ族を取りあげたが、この種族は他の種族に比べて容易に他文化に同化されやすい民族性を持っているように思われる。中でもラフ・シ族は特にその傾向の強いことを感じた。それは種族特有の衣裳を持っているにもかかわらず、日常は着用せず町から購入したTシャツやビルマスタイルといわれるブラウスにタイ人のはいている更紗のパシンという筒型スカートを着用している人が、他のグループに比べて多く見られた。他のラフ族も既に染織をやめ町から購入した素材を用いることが多くなっている。また、町でもラフ族用の手工芸をミシン刺しゅうにより製作して市販しているところもあり、それを購入してくるということも彼らから聞いた。私たちが調査した中でチェンライの山中の Cha・Phu 村では移動の途中にリス族との交流があったということであるが、リス族の衣裳の色相い

を取り入れている。これらのことでも容易に同化されやすい民族性であることがわかる。このようにしてラフ族の衣生活は他の山地民族に比べ近代化が進んでいることが認められた。それは外見的な衣裳ばかりではなく、習俗のなかにもいくつかの点が見られる。宗教においても一般に山地民族は精霊信仰が強い中において仏教やキリスト教の影響をかなり受けており、村の中に寺や十字架のみられる点や結婚式も牧師によって取り行われる村もあるようであり、彼らはこのようにして長い年月に渡り培われてきた独自の文化を放棄し、他の文化に対して順応してきている。しかし、その一方ラフ・クーラウ族の村人のようにシャーマニズムが中心で神からのおつげにより先祖伝来の黒い衣裳を、白い衣裳に変えたというシャーマンを中心に生活している種族もいる。かつては単一種族であったラフ族もラフ・ナ、ラフ・ニ、ラフ・シ、ラフ・シェレー、ラフ・クーラウ族のように分派し、次第に他民族との交流を行いながら徐々に平地タイの生活に同化され、祖先からの伝統文化が薄れていく傾向にある。この現実直面し、私たちは文字文化を持たないこれら山地民族の生活文化が消滅してしまわないうちにこの文化の深層を探究し、それを明確にとらえ後世に継承できるよう今後更にこの調査を進めて行きたいと考えている。

参 考 文 献

- 1) 村松一弥：中国の少数民族，187～188，毎日新聞社（1973）
- 2) 白鳥芳郎編：東南アジア山地民族誌，講談社（1978）
- 3) 田中 薫，田中千代：原色世界衣服大図鑑，保育社（1980）
- 4) カノミタカコ：染織 α ，特集，9，9～31，染織と生活社（1981）
- 5) カノミタカコ：タイの国より愛をこめて，染織と生活社（1982）
- 6) 鳥越憲三郎：雲南からの道，講談社（1983）
- 7) 織田秀雄：織りの事典，109～114，朝日新聞社（1985）
- 8) 前田 亮：染織 α ，49，16～22，染織と生活社（1985）
- 9) 若林弘子：高床式建物の源流，弘文堂（1986）
- 10) 石川栄吉他：文化人類学事典，812，弘文堂（1987）
- 11) J. S. Uberoi: *From The Hands of The Hills* (1981)
- 12) Paul and Elaine Lewis: *Peoples of the Golden Triangle*, 171～201 (1984)
- 13) Alan・R・Randall: *PEOPLE OF THE HILLS*, 111～128 (1987)
- 14) 慧妍雅他：中国少数民族衣飾，三聯書店香港分店（1985）